

# 全体討論

司会

奥村 弘

パネラー

平川 新 佐藤大介 蝦名裕一

新 和宏 西村慎太郎

菅野正道 久留島浩





奥村 色々話をしなくてはいけないことがあるのですが、討論の時間に限りがございます。会場の参加者からいくつか具体的な質問が来ていますので、私自身としては、それに対して報告者からお答えいただくことを大事にしたいと考えています。

おそらく平川さんも同じ考えだと思うのですが、私たちが神戸での大震災後に歴史資料レスキューを始めた時も、東北・宮城で活動を始められた時も、歴史資料保全活動が今日進められているような組織や方法をとっているということは、最初の段階では、まったく想定されていなかったと思います。

実は、大事なことはその点です。各地の歴史資料レスキューおよび保全活動は、一つ一つの活動の積み重ねの中で現在に至っているのであり、討論では今日の報告で触れられた内容を重要視していきたいと思います。いろいろな大きな問題もありますが、最初に率直な疑問やご質問が会場の参加者から出されています。まずはそこから答えをいただきたいと思います。よろしくお願いします。

最初は平川報告に対する質問です。京都造形芸術大学の内田俊秀さんから、「古文書と一緒に民家に保存されていた民具、美術品、芸術品は、その後どのように取り扱われていったのか」という質問が出ています。この点については先ほど久留島さんからも話が出されていますが、文書以外の資料を具体的にどのように扱っているのかという質問が出ています。

会場からの質問を先に紹介します。佐藤さんに対しては、関西大学の荒武賢一朗さんから「宮城資料ネットにおける調査資料は、どのようなかたちでオープンにされているのか。もしくは、これからどうなるのか」ということについて質問が出ています。蝦名さんには、お茶の水女子大学の武田美紗子さんから、「くりはら田園鉄道の動態保存は、資金やメンテナンスが大変だと思いますが、一体どうやってそれを確保されているのでしょうか」という質問が出ています。

まずはこの三つの質問からスタートしたいと思います。平川さん、お願いします。

平川 古文書以外の歴史資料をどのように扱っているのかということですが、われわれは古文書だけを保全するために活動しているわけではありません。

実際、7年前の宮城県北部地震のあと、最初に所蔵者宅を訪問した際に我々が何をお尋ねするかというと、「古文書はありませんか」ではなく、「古文書や

その他古美術品等を含めて、古い新聞、写真、アルバム、大事に残されているものはございませんか、おありでしたら今どのような状態になっていますか」ということでした。

我々のように文献資料を使って歴史研究を行う立場からすれば、どうしても古文書資料を保全するというのが第一義的になってしまいがちです。しかし、「歴史資料」と言うのは古文書だけではありません。内田さんからご指摘のあったようなモノ資料を含めて「歴史資料」とあるという言い方をしてきました。「文化財とは何か」というような定義付けの問題もありますが、私たちは所蔵者の方が「歴史資料」とであるとお考えになっているような、行政から指定を受けてなくても「文化財」とであると思われるようなものを対象にしています。その所在リストを作り、写真記録を残していく。同時に必要な保全のための措置をするということを行ってきました。

実際に、古文書以外の古美術品、あるいは民具などを私たちがどのように扱ってきたかということについて、宮城県北部地震の直後には、民具資料は数多く確認されました。お訪ねしたお宅では、古い農機具その他様々な道具が含まれて出てくるわけです。それらについては、引き続きお宅で保存されるという場合もありますし、保管していた納屋や土蔵などが被災するなどの理由で、ご自宅では保管し続けられないから引き取ってほしい、と相談されるケースもありました。

一方、専門家ではない私たちがモノ資料を引き取る、ということは難しい面も伴います。まずは地元の行政担当者の方に相談して、保管をお願いすることがあります。しかし、保管場所が確保できないなどの理由で叶わないこともしばしばあります。そのような場合には、引き続き所蔵者宅で保存をしていただくようお願いせざるを得ません。ただし、その場合には私どもで写真記録を採るようにしています。

それから、所蔵者の方をお訪ねした際には、絵画や軸物などの古美術品も、古文書と一緒に出てきます。美術的な価値が確定しているような絵画や書ですと、非常に大事にされているのですが、蔵の中に取められている虫食いがあったり、埃だらけになったりしたモノがたくさん出てきます。それらをどのように取り扱うかは、未だに悩ましい問題です。私自身は美術の専門家ではないので、絵画や書の学術的な価値の判定が出来ないからです。

ただ、所蔵者の方からは、まさにそのような資料に対して価値を判定してほしいという要望が多く寄せられます。しかし私たちとしては、まず骨董品のな

価値の判断はできないとはっきり申し上げています。一方、保全活動の中でそのような美術品が確認されたときには、ひとまず写真に撮った上で、包んだり、中性紙封筒に入れたり、古文書と同じような保存のための措置を施しています。

実は、NPOには考古学者や美術史家の方もメンバーとして入っています。必要であれば、これらの専門家の方々に撮影した写真を見ていただいたり、次の調査の時には同行していただくというような想定をして記録を採るようにしています。しかし、「次の調査」を実施して、そこで美術史の専門の方に現物を確認してもらうというところまでたどり着けない、写真記録を採るのが精一杯というのが現状です。

その理由ですが、いったん保全に入り、写真記録を採ったお宅を再度訪問するのは、スケジュール的になかなか難しいからです。保存の緊急性の問題からは、同じ所蔵者のお宅を2回訪問するよりも、別の所蔵者のところにおうかがいしたほうがいいという判断があるからです。したがって、実は古美術品などに対しては、十分な保全措置が施されていないというのが現状だということになります。

奥村 それでは佐藤さん、お願いします。

佐藤 収集した歴史資料の公開については、先ほど平川報告のほうで写真帳を作っているということを申し上げました。写真帳は、実は所蔵者の方に差し上げる分も含めると5セット作成しています。残りの4セットですが、NPO事務局のある東北アジア研究センター、調査が行われた地元教育委員会の担当課、宮城県の歴史系博物館である東北歴史博物館および宮城県文化財課に保存されています。

これらの公開については、まず、所蔵者の方に可否を確認する手続きを取ります。そこで承諾が得られたものについて写真帳として公開をすることになります。したがって、現実にはそれを研究などで利用する場合には、NPOの事務局か、地元の教育委員会に問い合わせをしていただくことになります。

一方、写真帳を公開している、という広報は今のところ行っていない。現状ではNPOの事務局で公開の体制が整っておらず、基本的に個別に対応することにならざるを得ません。もう一つは、公開の許可が得られたとしても、個人情報保護という問題があるので、そのような点にも配慮して、「公開している」ということを公に知らせるかたちにはしていません。もしNPO事務局で保管

している分の写真帳を利用したいという場合には、いまの事務局体制で可能な範囲で対応することにしています。

写真帳などをどのように扱うかについては、行政に差し上げたものは行政側がいろいろな考え方をされているようです。そのありかた自体を改善したり考えていくべきところはあると思うのですが、現状はいま申し上げたような状況です。

蝦名 くりはら田園鉄道（以下「くりでん」）の動態保存について、まず、くりでんの清算事業が2010年7月末日で終了したので、その資産はすべて栗原市へ移管されました。

現在の動態保存については、メンテナンス等は、資材等一式は栗原市のほうに引き継がれましたので、これらを使ってOBの方のボランティアなどで行っています。

燃料をどこから買ったかという点については確認を取っていませんが、いまのところは行政が主導して行っているようです。

ただ、今日の私の発表は、動態保存が実現してよかった、というまとめ方をしたわけですが、もう少し広げて考えてみると、廃止された鉄道の動態保存に、どういう価値を見いだすのかを試されている時間であると言い換えても過言ではありません。動態保存は確かに実現しましたが、それではこれがいつまで続けられるのか。それが市の負担になるのか、あるいは地域活性化の起爆剤になるのかということが、現在試されているところです。

したがって、「動態保存が実現してよかった」で終わりではなく、今後くりでんの施設をどのように活用していくか、我々としても常に考えていかなければならない問題と思っています。

奥村 それでは議論の方向性ですが、最初に平川さんの報告から出た問題で、やはり宮城の話を私どもが聞いて思うのは、活動の一番基本のところ、宮城県では30年以内に99パーセントの確率で必ず地震が来るという話があることです。

場所を広く取っていくと、日本列島ではこの間2年に1度ぐらいのレベルで、人が亡くなるような規模の地震が起きています。水害の規模も大きくなってきて、毎年どこかで起こっています。現時点（2010年11月）でも、10月に発生した奄美大島での水害における歴史資料レスキュー問題を抱えており、引き続



き情報交換をしているところです。

いま各地で活動している史料ネットは、このように災害が多発する状況の中で活動をスタートしました。コメンテーターの方々も述べられていますが、「来るべき地震」、すなわち災害の発生を前提に組織が生まれてきて、活動が出来上がってきているというところがあると思います。

その前提から現れてくる課題は、やはり歴史資料の保存と活用という一般的な問題につなげていく一方、災害を前提にした活動にならざるを得ないという問題との両方があるように思います。そのことが、各地での活動のスタイルや組織の在り方をどのように考えていくかという問題の前提になっているのではないかと思います。

活動や組織の在り方の問題は、以上のような点でも、さらには地域で背負っている伝統や社会の在り方によっても違いますが、やはり大きな問題としては、大規模な災害との関係性を常に意識しているところがあるというように思われます。

平川さんが、最後に課題はいろいろある、話したいことはまだあるといって報告を終わられたようですが、NPO 法人も立ち上げられて、その課題についての報告を時間切れで省略されました。もしこの場で補足をするのであればお願いします。

平川 コメントの方を含めて、いろいろとご意見をいただきました。それぞれ考えさせられることが多いと思います。

われわれの活動自体は、災害を契機に始まったのですが、振り返ったときに、宮城県の北部連続地震が来る前に、一人の歴史研究者として、地域の古文書・歴史資料を保全しなければいけないという意識が自分自身にあったのかどうか。ほとんどなかったと思います。

個人の研究者としては、自分のテーマに合わせて調査したい旧家を探し出して、そこで関連するような資料を見たい、という形で調査を行ってきました。また自治体史の編さん事業に参加したときには、そのための資料調査を行います。組織としての編さん体制が続いている中では、歴史資料に対しての整理や保存措置がそれなりに行われます。しかし、先ほどある地域の事例として紹介されましたが、県史編さんが終わった 30 年後には、そこで調査された歴史資料の 20 パーセント近くが消滅していたというような話もあります。

個人の研究のために行う調査では、写真は自分が撮りたいものだけを撮りま

す。そのデータが所蔵者に返されるわけでもありません。私自身も、撮影した写真版を焼き付けて所蔵者の方に持って行ったことは一度もありません。書いた論文は当然お送りしていたのですが、そのような意味では、私自身も実は7年前の地震を契機に、歴史研究者は資料保全することを役割にしないでいいのではないかと、深く考えるようになりました。

今までの歴史学科などでの教育の中では、「アーカイブ」（文書・文書館）という言葉は教えられてきました。しかし、在野にある歴史資料、特に未指定文化財等の資料について保存するための教育システムがどれだけあったかを、非常に大きく反省させられました。

ですから、これは史学科を持っている多くの大学に期待をしたいところですが、アーカイブの学問領域を、公的機関に保存されているような古文書をどう分類し整理するか、そこにどのような価値を発見していくかということではなくて、地域の個人宅など、在野に残されている歴史資料も学問の対象にしていただけないかと思えます。

私自身はこの活動を行っている中で、単なる歴史資料の保全「運動」ということではなくて、歴史資料保全「学」として新しい学問体系を作り上げていく必要があると考えています。だからこそ、若い人たちが、一生懸命に様々な方法論を開拓していつてくれているわけです。いまおこなっている歴史資料を保全する方法は日々更新されています。昨年のやり方と今年のやり方は違う、常に進化しつつ、目下の歴史資料保全活動が進んでいると考えています。

今日の報告の中で、NPO が歴史的にどのような役割を果たすのか、権力の使い勝手のいい道具にされてはいないか、新自由主義的手段になっていないかという指摘がありました。それから、NPO がどの程度の継続性を持つのだろうかということなども指摘がありました。確かにその懸念はもっともなことではあります。

しかし、私たちがNPO 化に際して史料ネットの仲間たちと協議したとき、そのことを議論しても仕方がないという結論になりました。いま我々がすべきことは、目の前の歴史資料が消えていこうとしているなかで「いま」何をできるかということ、どういう体制が一番効果的かということを考えてやっていこうということです。したがって様々な問題点については、あえて思考停止しています。

そのことを議論し始めると、結局は堂々巡りの議論と思考にしかありません。そのような議論は非常に消耗します。いま我々に精神的に消耗している時間は

ありません。我々は日々の歴史資料保全活動で肉体的に疲労しています。その上精神的な疲労まで加えたくないということです。とにかく、今は活動するしかないというのが現状です。

私は、NPO が主体となった活動に対する歴史的な判定は、数十年後の人々にしていただければよいと思っています。したがって、いま私たちが自己評価をするのはやめようと考えています。考え始めると、歴史資料保全活動をおこなう意味があるのかどうかを問い始めてしまう。そうすると「意義がわからないからやめよう」という選択肢になってしまうと困る。やらなければいけないことだけを目標にするというのが、今の我々のスタンスです。

活動の主体という問題からは離れますが、菅野さんから指摘がありましたが、古文書史料の撮影を、マイクロフィルムで行うか、デジタルデータを活用するかという点についても我々は相当に考えました。

マイクロカメラ1台を購入するには50～60万円します。数万点の古文書の写真を撮るときにはカメラを10台程度並べて行っています。しかし、マイクロカメラを10台購入するだけで500万円から600万円かかります。そのような資金はどこにもありません。現状で購入できるのは、数万円で買えるデジタルカメラのみです。しかも、デジタルデータであれば現像代は不要だという事もあって、「いま」できる保存の方法ということで、デジタルカメラでの撮影を続けています。

先ほどのコメントにありましたように、デジタルデータがどれだけデータとしての信頼性を担保できるのか、という指摘は常々受けています。もし本当にきちんとしたかたちで、デジタルデータでない形で残したい資料のデータは、マイクロフィルムで撮影すればいいでしょう。しかし我々の保存のやり方に対して、マイクロカメラで撮るべきだ、などという注文だけはつけないでほしい。マイクロカメラで撮りたいという史料があれば、どうぞ撮影したい方が撮影してください。私たちはマイクロフィルムで史料を残すことを否定はしません。信頼性が保証されるという事ならば、むしろいいことだろうと思います。

今はマイクロカメラとデジタルカメラと両方の手段があるので、史料保全に当たる組織・機関ができることをそれぞれやればいい。マイクロカメラでの保全はできないが、デジタルカメラなら出来るので利用している、というのが我々のスタンスだということです。

奥村 撮影というのはいわば一種の「目録化」でもあると思います。先ほ



どから「宮城方式」と呼ばれている古文書資料の撮影方法については、私たちが活動している関西でも実演をしてもらって、このような方法なら少ない人数でもたくさんの資料を、短い時間で撮影できるという、非常に「目からうろこ」ということを感じました。

けれども、そのような撮影方法については、どういう場において、どのような状況で行うのかという問題を抜きにしては当然語れないと思います。その点について少し佐藤さんに補っていただきたいのが、司会者からの質問の一点目です。

もう一つは、西村さんに対して武田美紗子さんから質問が出ています。目録をつくるということについて、「歴史資料を保存する目的には、保存の方法や、どのような目録をつくるかという実利に即して考えていく必要があると思っ

ているのですが、たとえエゴであっても、各人のニーズと違って役に立つということがあってもいいのではないかと思うのですが」という質問です。

これは関連するような話になるかと思うので、先に佐藤さんから、若干「宮城方式」での撮影方法について補っていただいた後で、そのことも含めて西村さんに意見をおうかがいします。

佐藤 この場で技術的な説明を細かくしてもどうかと思うので、その点についてはNPO 法人の公式サイトに撮影マニュアルを公開しています。興味のある方はご覧ください (<http://www.miyagi-shiryounet.org/01/satuei/satueihou01.htm>)。

現状は、とにかく大量に未整理の資料が出てくる状況です。これを先ほども申し上げたように、限られた予算と時間で、次々と記録化していかなければいけない。だから、とにかく大量に撮影します。

今まで撮影した資料のコマ数は約 60 万カットです。繰り返しになりますが、ここ数年内に保全活動を行わないと、かなりの歴史資料が消滅してしまうという危機感を持っています。そのようなこともあるので、現像の時間を省くというかたちで、とにかく大量に撮っていきます。

現地での活動ですが、参加できる人数も限られているので、例えば 8 人で調査に行ったら、誰々は目録を撮るとか、誰々は何の係ということではなくて、とにかく全員がカメラを回す。撮影に動員できる人数も、普段は 7~8 人程度ですが、このぐらいの人数で撮影作業をすると、一日あたり原資料の点数で 500 点ほどの撮影が可能、というデータも出ています。

一つの所蔵者のお宅に古文書が1万点所蔵されている、というような例も宮城県には少なからずあるのですが、大半の所蔵者方での撮影については、「宮城方式」により1日で終わらせることができます。言い換えれば、「調査が一日で終わるような撮影の方法」だということです。

西村 僕はたまたま平川さんや佐藤さんと一緒に、東北ではない地域で「宮城方式」での活動と一緒に行ったことがあります。

僕も先ほどの奥村さんの意見と同じで、「目からうろこ」というか、このような方法があるのだと、非常にためになったと感じました。おそらく、大量に歴史資料の整理・調査をする場合には、この方法が一番だと思っています。いまのところこれ以上に手早くやる方法はないと思っているという意味では、今後何らかのかたちで、僕もこのような調査方法を採用してみたいと考えています。

ただ一つ問題なのは、写真を撮るというのは、文献史学としてのコンテンツ（資料の内容）の部分だけしか保存できないということです。紙資料を専門に扱う保存科学の専門の人などにとっては、研究としてはまったく意味を成さない可能性があるのではないかと思います。

そのように考えると、僕が先ほど言いたかった、また久留島さんなどもおっしゃったように、やはり歴史研究者が主体となっていることを前提に考える歴史資料保存活動である、ということが、「宮城方式」に関する僕の肯定的な評価となります。

武田さんからのご質問の意味が少し理解できません。もう一度お願いします。

奥村 では、武田美紗子さんに質問を補足していただきます。

武田 お茶の水女子大学大学院修士1年の武田美紗子です。

西村先生に聞きたいのは、資料の18枚目で、「資料を遺すことは果たして重要と言えるか」というところです。ひと言私の意見を入れて、先生の意見をうかがってみたいと思います。

資料保存の必要性について、私は、例えば目録を作成するときには誰が使いやすいようにつくるか、といった実利的な部分のために資料保存の意義というのは考えるものだと思っています。私も近代史を専攻している「研究者の卵」ですが、たとえ史料保存が「エゴ」であっても、社会のために何らかの役に立っているのであれば、各人のニーズが異なっても、重要な活動だと言えるのでは

ないかと思うのですが。

西村先生のおっしゃっていることとずれてしまったかもしれませんが、どう思われますか。私は実利的な部分を考えれば、資料保存を行うのはどのような理由であってもいいのではないかと思うのですが。

西村 この部分については、先ほど久留島さんから、地域の解体の話などで少し出てきていましたが、僕自身は、歴史資料を残すことが重要だということの逆の言い方をしています。歴史資料を残すのは、僕の場合は歴史研究者だから絶対遺さなければならないと思うし、そのために目録を作り、複製も作るということを考えています。

問題なのは、歴史資料を保存するというだけの問題ではなく、先ほどから申し上げていますが、地域が解体しつつある。コメントの中では「変質」とか「変化」というようなおっしゃり方もされていました。おそらく、僕が大学生だった1990年代の半ばぐらいは、「歴史資料の保存」といえば、「地域のためになる」というひと言で片付けることができていた時代だったと思います。以前はその論理で大丈夫だったのが、いまは「えっ、地域のためと言われても」という反論がある可能性もあります。

また、やがて世代が変わっていき、教育の問題も含めて、いまの子どもたちが大人になっていった段階で、「地域のためなのでお願いします」と言っても、「そんなことは関係ない」と言われる可能性があります。ですから、それに対する予防線と言っては変ですが、多様になった個人のアイデンティティというものに対して訴えかける方法の一つとして、「地域のためだ」、「(歴史資料を)保存しろ」と言うだけではなく、やはり歴史研究の目的であるということをきちんと明確に言い、自分たちもそれに対する答えとして歴史研究の成果で応えていくということが必要だという意味で、ご指摘の部分は報告させていただきました。

奥村 いまのご発言も含めて、議論を進めさせていただきます。先ほどから出てくる「地域」をどのようにとらえるかということについていくつか質問が出ています。

一つは、荒武さんから平川さんや西村さんに対して、「調査地域の中では過疎や限界集落の深刻な問題があると思うけれども、そのようなところをどう考えるかという課題と、歴史資料の保存・継承はどのように関係していると思

ますか」ということが出ています。

斎藤善之さんからは西村さんに対して、「地域の解体は自明というようにご発言されているけれども、本当にそうなのだろうか。確かに、これまでの国家・地域の関係は変容あるいは再編していると思うけれども、私たちが生存する『入れ物』としての地域社会は存続しているし、そのためのデータベースとしての古文書の存在意義は、むしろいま増しているように思うが、そのあたりのことをどうお考えですか」という質問が出ています。

「地域」に関してどう考えるかということは、それだけで進めていくと議論が終わらないような気がします。今日は「地域」ということを一般的に論じるよりは、この間宮城で行われたことの中から、平川さんや佐藤さんがこの問題をどのように考えるか、また西村さんが伊豆の中でどう考えているかを具体的にお話してもらう方がプラスになると思います。

そういうことも含めて、現在の地域社会をどのように考えるかということについて意見をおうかがいします。もし会場の方から何かありましたらお話ししていただくというかたちにしたいと思います。

では、まず平川さんからお願いします。

平川 実際に我々が地域に入って資料保全活動をやるときに会う問題が、今ご指摘をいただいた過疎や限界集落という問題です。現在、旧家が多く残っているのは、その問題に直面している農村や山村、中山間地域でもあります。

我々がお訪ねしたお宅では、すでに老夫婦だけしかいらっしやらないというお宅が少なくありません。「息子や娘たちは街に出ていき、もう帰ってくるつもりはない」ということは、現在生活されている屋敷や土蔵、歴史資料を引き継いでいくのは、当代のご夫婦で終わりになるということです。

我々がそのような個人宅におうかがいして歴史資料の保全措置をしたときに、「子どもたちが資料に関心を持ってくれるとはとても思えないのですが、そのときにこの資料をどうすればいいのでしょうか」というご相談を受けることがしばしばあります。老夫婦世帯、さらには夫婦がどちらかお一人になっているご家庭の場合は、あと何年その場所で歴史資料を保管していただけるのか、という問題が出てきます。そのままの状態にしておけば、当代のご夫婦がいなくなったときに、家屋敷ともども処分されてしまうことになっていくと思われるます。

したがって私どもから所蔵者の方に対して、歴史資料の保存については公的な機関に相談いただけないか、寄付や寄託などいろいろな方法があるということをお伝えしています。公的な機関に管理についてご相談していただくことにより、「〇〇家文書」という形で、お宅に伝わっていた歴史資料として次の世代に残っていくということをお伝えする。そのようにしてご相談に対応しています。「家の名前が残る」ということは、大いに収蔵者の方々の関心を引きつけるようです。実際、これまでも公的な機関への寄託や寄付が何件も実現しています。

また、我々が地域での歴史資料保全活動で感じるのは、災害を契機に活動を始めたとはいえ、実は災害以外の理由で古文書が消滅するケースはもっと多いということです。家の世代交代、これは先ほど述べた、子どもたちがもう都会からその家には戻ってこないということも含めてです。それから、これまでお住まいだった家屋を新築・改築されるケースです。古い母屋に保管してあった史料を改築の際に処分した、蔵を解体するとき中に保管されていた史料を燃やした、古書店に売却したといった事例を、我々も数多く伝え聞いております。

ですから、過疎化や限界集落の問題だけではなく、このような世代交代や家屋の改築などに際しての保存という問題を視野に入れて活動を展開していかないといけない。このようなことまで含めると、活動は際限がない状態になります。

けれども、際限がないからといって活動をしないわけにもいかない。そのようなところで、活動に区切りをつけるきっかけを失っているというのが正直なところです。

佐藤 私の申し上げたいことは、ほとんど平川さんから申し上げた内容と重なります。

なお、西村さんのご報告にあった「歴史資料を保存するのは研究者のエゴなのか」という点ですが、私自身はそうは思いません。地元の方におうかがいすると、平川さんからも紹介があったように、「この家は私たちの代で終わってしまう。だから、せめて史料だけは残してください」と依頼されることが実に多い。ですから、私たちが行っている歴史資料の保全という活動は、まさに所蔵者や地域のために行わなければならない仕事だと思っています。そのことに携わることに、歴史研究者としての私は全く矛盾を感じていません。

もし関東でもどこでも、歴史資料保全活動なり史料調査の意義について、そ



れが所蔵者や地域にとって「迷惑」だなどということを、活動に関わる研究者自身が発言するということは、それはいかながなものかと個人的には感じます。

また、西村さんの報告にあった一般の人々の「歴史好き」が「オタク文化」と「英雄史観」に限られるという評価、これは一例を挙げているのだと思うのですが、これも私にはよくわからない。私は自分の研究で歴史街道の調査などをしていますが、その活動には研究者などよりは、むしろ多くの市民の方が積極的に参加している。そのような活動も含め、先ほど斎藤さんからご質問があったように、歴史資料を研究ではもちろんのこと、社会の中で様々なツールとして使っていく方法や、新たな価値を見いだすという要請は、むしろ高まっているのではないかと感じているところです。

私自身としては、社会との関わりということに動機を見いだしているのですが、蝦名さんはどうでしょうか。

蝦名 急に話題を振られてちょっと驚きました。

私も平川さんや佐藤さんと活動しているフィールドが一緒なのですが、ある地域に入っていて、やはり、地域の古文書資料を地域の方が解読できない、要は、活用の方法がわからないというようなところがネックになっています。歴史資料を持っていもしようがないと思うような方に対しては、私の報告で示した「学・官・民」の関係モデルで言えば「学」、つまり研究者の働きかけによって、歴史資料に対していかようにでも地域住民の関心を引くこと、あるいは地域の活性化の起爆剤にするといった、いろいろな可能性を秘めていると思います。

歴史資料というものは、いろいろな可能性を秘めているものです。われわれが活用の方法なりを思いつかなくても、別の誰かが思いつくかもしれません。そうであるならば、多くの歴史資料を保全して後世に残していけばいいという考え方で、保全活動を行っています。

西村 先ほど平川さんのお話にある、僕がいま調査をやっている山梨の事例では、娘さん3人が嫁いで、もう跡取りがいないという名主さんのお宅や、報告の冒頭でお話しをしたフランスのコレージュ・ド・フランスとコミットしているという話は、実はそのお宅の方が国際結婚をされて、文書などを自分がこれからお住まいになる場所の近くに置いておきたいというご意向で、コレージュ・ド・フランスにお預けすることになった、という事例です。このような

事例は多々あります。

限界集落や過疎化の問題を目の当たりにしていて、それと歴史資料保存がどのように関わるかというのは、今すぐに答えが出ないので、今回は平川さんの報告に乗ったかたちで自分の事例を紹介しました。実際に山梨だと、やはりお宅に跡取りがいない、子供たちは甲府や東京に出るということで人口が減っていき、文書自体が神田の古本屋に売られたという事例も実際にあります。

先ほどから史料保存の話の部分で、僕の報告の仕方が悪かったかなと思っているのですが、「歴史資料を保存するということがエゴになっていないか」というのは、自分自身に向けての批判であって、他の人がどうこう、ということではありません。

やはり、ただ「史料保存」といっても納得してもらえない時代になるのかと思っています。先ほどからの報告にあるような、地域の方々の歴史的な意識や関心と呼ぶというのは、僕も実際に南伊豆で「南伊豆を知ろう会」という歴史の報告会を開催すると、やはり100人の参加者が集まります。山梨でやっても延べで200人ぐらい参加されるので、非常に関心が高いと思います。

その反面、蝦名報告でのくりはら田園鉄道の活動事例については勉強になりました。自分のこれからの活動でも応用したいと思います。ある程度の年齢層より上の方は報告会などに参加されるが、年齢の若い方は来ない。歴史資料の保存を考える上で、これは実はかなり怖いことだと思います。僕の報告の中でも述べましたが、年齢層の-highいかたはよくても、若い方の意識はどうであるかというのは、おそらく今後の課題でしょう。そのことについては、史料保存に小中学生をどのように巻き込むのかということとも、非常に関係しているのではないかと考えます。

もう1点、地域の解体については、僕は非常に危機感を覚えています。例えば、「平成の大合併」で、山梨県では自治体の合併率が60パーセントぐらいです。知っている範囲で述べると、合併して一つの市になったある自治体では、合併前は各自治体に文化財担当者が必ず一人ずついましたが、合併後は半分の3人に減らされました。要するに、元々の各地域の様子を知らない人が、その地域の文化財を担当しなければいけない。おそらく、どの地域でも同じような問題に直面しているのではと思われます。

そのようなところから考えると、地域の「解体」というのは少し言い方が悪いのかもしれませんが、僕は危機感を多分に持っているということです。

奥村 地域の問題ということ考えたときに、先ほどのNPOの問題など

を含めて、それから子どもの参加という問題もそうだが、博物館や行政との関わりというのが実は非常に大事です。最近はやりの言葉では「官・学・民」などいろいろな言い方をするが、相互関係という問題が非常に大事だと思います。

そのことについては先ほど菅野さんから少しお話していただきましたが、なかなか難しいところもあります。

新さん、各地での史料保存ネットワークを調べて、もしくは、いま作られつつある千葉でのネットワークを行おうとしている中で、三者の関係ということでお考えがあれば、ご発言をいただけたらと思います。

新 今のご質問の前に、資料をいかに保存していくかで、千葉県でも、あまり具体的な事例を出すと問題もあるのですが、地域の人々が「文化財」というものを意識しなくなっているという現状があると思います。そのことについては西村先生のお話の中にもあったと思います。

例えば、先日久留島先生ともお話をしましたが、千葉の外房地域にある町では、神輿を担ぐ祭りが、ずっと昔から行われていました。その中には神輿を海水に漬けるという行事があるので、神輿は当然傷んでしまうわけです。

その神輿を修復するためには、毎年お金がかかります。今までであれば、地域の人たちが神輿は自分たちのものだ、自分たちが守っていく行事だということで、修覆に資金を投じるということについてまったく違和感がありませんでした。ただ、最近は地域に新しい住民の方が入ってくることによって、なぜ自分たちが資金を出さなければいけないのか、という意見が出された、ということもたくさんあります。

ですから、モノ自体が失われていくという中には、地域の人たちが自分たち



の行事や祭り、自然遺産を含めて守っていくのだという意識が、少しずつ失われているということが反映されているのではないか。ある地域に新しい人たちが入ってくれば入ってくるほど、その傾向が強くなってくる。ですから、博物館の立場から考えれば、そのような側面でのミュージアムリテラシーというか、いかに地元の文化財を自分たちの力で守っていくのかという意識を喚起していくことが必要だという考えです。

博物館とすると、やはり現物の資料ありきですから、資料自体がなくなると博物館の機能そのものがなくなってしまう。現物の資料を保存するという部分に対しては、われわれ博物館人のミッションがあると考えています。

奥村 菅野さん、いまの新さんのお話ですが、市町村史の編さん事業においては、新旧含めた地域社会の中で、歴史を地域の住民に知ってもらうという課題があるような気がしますが、今までの議論を聞いて、意見などがあればお願いします。

菅野 「地域」という概念や現状にはいろいろとあると思います。宮城資料ネットで重点的に活動しているのは、過疎化が非常に進んでいるところが中心になっています。

一方で、私が仕事をしている仙台市を見ると、一部には過疎化が非常に問題になっている場所もあります。しかし同時に、かつての旧家が残っているところに団地が造成されている、あるいは旧家も含めたかたちで都市区画整理が行われて、古い集落の中に新しい住民が入り込んでいくという場所もあります。

そのような地域での歴史資料保存や地域の歴史の活用にはどういう問題があ





るのか、例えば私ども仙台市史編さん室では、年に2回の「市史講座」を開催しています。これはかつて「出前講座」という名前でしたが、仙台市内には約50か所の「市民センター」、他の地域で言う公民館がありますが、そこまで出向いて行って、センターが置かれている各地域の歴史の話をします。

これは、各地に資料調査に行くと、歴史が好きな方、あるいは古いものをお持ちの方であっても、意外と博物館には来ない方が多くいらっしゃるからです。特に私ども仙台市博物館の場合は、仙台藩主の伊達家の所蔵品が展示の中心になっている。だから「(仙台市)博物館の人に来てもらっても、うちには何も宝物はないんだけどね」ということを、何回も言われました。

しかし、我々から見ると、それこそ骨董屋さんで何十万円もするもの、あるいは非常にきれいなものだけではなくて、本当にさもないようなものでも、それには決してお金には換算できない歴史的な価値がある。我々はそのようなものをきちんと調べていき、ぜひ後々に残していきたい。そのことが、それぞれの地域を大事にしていくことにつながるという話をしたこともあります。

このような状況を反省して、出前講座を企画しているのですが、ここにも意外と多くの問題があります。

一つは講座のコアなファンの方がいて、そのような方はどの市民センターで講座を開催しても必ず参加されるということです。一面では非常にうれしいことではありますが、やはり講座が開催される地域の人たちに、自分の住んでいるところの歴史を知ってもらうということが目的ですから、参加してくださる方々に少し偏りがあるともいえます。

古くから地元に住んでいる方は、実は意外と講座には参加されません。むしろ新しくその地域に移って来た方が、自分の家があるところはどういう場所なのかということで、講座に参加されます。

これは私どもが行っている「市史講座」以外でも、市民センターで開催される歴史の講座、例えば各市民センターで文学・歴史・時事問題などの講座である「老壮大学」や歴史サークルの講師に呼ばれて行くことがあります。元々の住民の方々が参加することは意外と少ない。この点を、今後の資料保全でどのように考えていくのか、非常に大きな問題だと思います。

ただし、現在の仙台市では「地元学」や『平成風土記』の編さんという動きが盛んになっています。これは地区ごとに住民の人たちが中心となり、自分たちの手で地域の現状や歴史を記録していこうという活動です。地域によってかなり異なるところもありますが、その活動もやはり新しい住民の方々が中心に



なっている場合が多いようです。

地域の現状や歴史を調べる活動を行うことによって、その地域の旧家の人たちと新しい住民の人たちがコンタクトをとるきっかけができます。その中で、歴史資料の保全、しかも単に「保全」するだけではなくて、先ほどから宮城資料ネット、山梨や伊豆での資料保全運動と関わった形で、地元の人たちに対する資料情報を提供することが非常に大事になると思います。

仙台市史編さんのような自治体史の編さん事業も、先ほど久留島先生からあったように、自治体史として本を刊行すれば終わりではない、ということが非常に大きな課題としてあると思います。

実は、私どもの市史も一時は「終息」という表現を使って、関係者と今後の進め方について話をしていました。しかしある時点からは、なるべく「終息」という言葉は使わず、「今後の展開」という方向に持っていきたいと考えています。その展開の中では、活動を博物館の中だけにとどめず、組織の外や地域に出て、様々な地域の歴史に関する話をすることが重要になると思います。

奥村 実は、今日の報告において、災害などの問題などを考えれば、今度、千葉にネットワークが出来つつある、福島でもまた新たにネットワークを作ろうということになっているといったように、各地で資料保存ネットワークが出来上がりつつあります。しかし一方では首都圏を中心に巨大な空白地域が存在しているのも事実です。しかも、その地域で地震が高い確率で発生しそうだという予測もあります。

今日の報告の中では、このような問題も含め、大学や行政、博物館、NPO が果たすべき役割についても、いくつか議論が出たかと思います。

一つだけ質問で、斎藤さんから西村さんに対して、「文書や文化財保存は国家がやらねばならないという問題を、どう考えたらいいのか」という趣旨の質問があります。主旨については斎藤さんから直接お話されたほうがわかりやすいと思うので、少し補足をお願いします。

斎藤 今日のシンポジウムを聴いて大変勉強になったことは、私も宮城資料ネットの一員として活動しているが、歴史資料を保存し継承するという問題に関して、様々な取り組み方がある、ということがわかってきたことです。千葉県のように行政などしっかりした機関が関わるかたちや、NPO でも大学をベースにした例であるとか、今回の西村さんの活動は比較的パーソナルな形でのNPOと受け取ったのですが、そのような方法もあり得るということです。

歴史資料の保存・継承という問題に対して、いったい誰がどうやるべきなのかということは、実際に活動している我々研究者自身が常に自問しながら行っていることでもあり、果たして本当に研究者がその役割にふさわしいのか、ということも自問しながら、地域で活動しています。このような議論をすると、平川さんからは、先ほどの発言にあったように「思考停止しろ」、そのようなことを考えるのはやめろと言われるのですが。

もう一つ、今日のシンポジウムの中では、それぞれのやり方にメリットとデメリットの双方があるというのがわかったことが、とてもよかったと思います。これだけ様々な取り組みをしても、どの活動がよい、とは一概に言えないということもわかりました。例えば行政が主体となる場合には、継続性がありそうだがなかなか活動が立ち上がらないとか、行政のトップがだめといったら急に方針が変わってしまう可能性があり、そうなれば外部からは活動に対し手出しができなくなるとか、いろいろな問題があります。

NPOの方は、「継続性」をどのように持たせるかということを常に考えています。実は、前回の岩手・宮城内陸地震の当日（2008年6月14日）、平川さんが土石流で被災した栗原市の温泉旅館に宿泊しようになっていたという状況がありました。組織の代表にもしものことがあったとき、われわれはどうするのかというような組織の継続性については、実は最も深刻に考えています。

「深刻」ということは、要するにこの組織をもっと継続させ、永続させていかなければならないだろうと思うのですが、NPOという組織はできてまだ日が浅いですし、菅野さんや久留島さんが言われているように未検証な部分も多い。これをきちんと継続的に運営できるのかどうか、重要な課題になっているのではないかと思います。

そのような意味では、先ほど西村さんが「歴史資料保存の問題は、最終的に国家が主体となって行うやるべきだ」ということを少し言われたと思います。それも一面では正しいと思うのですが、やはり災害のときには消防車も救急車もなかなか来ない、だから自分たちで何とかしなければならない部分もある、ということを考えたときに、目の前で歴史資料が日々失われていく状況の中では、NPOとして活動しなければならないことはどうしてもあります。そのような状況で、実はわれわれはデジタル技術を「苦渋の選択」とは言わず積極的に採用していった。パーフェクトな画像を一コマ撮影するよりは、デジタルデータではあっても100コマ撮影した方がいいと考えたからです。

さらに、「パーフェクトな一コマの資料を残す」という中では、どうしても

資料の「選別」という問題が入ってくると思います。デジタルカメラでの撮影は、どの資料を後世に残すかという選択をできるだけ大きなパイ、すなわち沢山の資料を残すことで、研究者の恣意を少しでも排除していきたいという方法でもあります。

宮城資料ネットの調査方法がパーフェクトと思って活動しているわけではありませんが、一つの方法として、究極のところまで「史料保存」を突き詰めてみたいということがあって活動してきている意図があります。

西村報告のまいた「エサ」に引っかかった感じで質問を出してしまいましたが、私が申し上げたかったのは以上のようなことです。

奥村 個別に質問に答えてもらうというよりは、もう時間もないので、もし会場の方からご質問があればお願いします。

お二人が挙手されていますので、そのお二人から発言をいただいて、あとは皆さんの意見を話していただくというかたちにしたいと思います。

会場1 視点をまったく変えて、歴史の研究学者の態度ということでお尋ねします。

文化財というのは、かつて備えていた機能が喪失したから「文化財」であり、「文化遺産」ということになります。くりはら田園鉄道の保存も「動態」ではあっても、鉄道会社という本来の機能がなくなったから「文化遺産」になったわけです。

しかし、家というものの中で文化財を持っている人たちは、依然としてその場所に住み、家の歴史を「繋いでいる」ということがあります。そこには家系図なり、あるいは家の歴史を「語り」で繋いでいるということがあると思います。

「保存」ということは、現代社会において相応の意味付けをしなければならなし、また未来社会につないでいくということだと思います。

そこで、先ほど古文書の返却の行脚で非常に悩んでおられた佐藤さんに、学者の世代間倫理ということでお尋ねしたい。文化財所有者の場合は、世代間の倫理で何とかつないでいくということで、数百年間資料の保存が続いている家もあると思います。そこに学者という人が「土足」ではないにしても調査に入ったとき、その成果を自分の研究だけのもので終わらせてしまっているのか。

大学には研究室があると思うが、その中に入った研究者が、学者倫理、研究者倫理として、このような問題を世代間につないでいくことをやっている

れば、私はいろいろな問題は起こってこないと思います。所蔵者と研究者は常に並行してつないでいっているわけです。資料を借りた家の世代につないでいく。大学の研究者の側では、研究者としてその問題について世代間をつないでいく。そうすれば、様々な問題も解決とは言えないまでも、非常に理解してもらえるし、平川先生の報告では所蔵者の方に写真を渡すなど色々なことを言われたと思うが、そのあたりは研究者の倫理、世代間倫理という両方の問題として、どなたかお答え願いたいと思います。

奥村 では、これもあとでパネラーの皆さんの発言の中に含み込んでもらうようお願いします。

もうひと方、お願いします。

会場2 大沼正七と申します。宮城県内の村田町で生まれ、今日参加させていただきました。

私は「宮城方式」という調査方法によって、私の家に古くから残っている資料を研究者に提供し、大変素晴らしい成果を与えていただいたことを感謝しています。そのことについて若干紹介するとともに、私の所見を手短に述べたいと思います。

今日の5人の報告者の中で、佐藤さんと蝦名さん、その他に山形大学文理学部の岩田浩太郎先生が中心になって、平成15年（2003）から21年（2009）まで6年間かかり、合計11回、一年あたり2回の現地調査に、研究者の方のご参加が延べ120人、6年間で30日を費やして、それこそ「悉皆調査」と言っている、徹底した調査をしていただきました。

その動機になったのが、私の古くから育ってきた家屋を永く村田町民に残したいということであり、当時の町長と建物の寄付について相談したところ、喜んで私の申し出に応じていただきました。その機会に自分の所蔵品を点検したところ、私の見ていなかったような史料もたくさん出てきました。それを岩田さん、佐藤さん、蝦名さんにご覧になっていただいたら、大変わくわくするような史料だという評価を得ました。

文政（1818-30）、天保（1830-45）から昭和22年（1947）まで、敗戦直後までの史料が、生活史を示す家計簿なども全部継続的に保存していたので、大変有意義な結果を調べていただきました。

デジタルカメラで撮った成果はすべて、CD-Rにして提供者の私にも提供いただきました。村田町でも研究調査結果の中間報告を実施していただいて、文

字どおり「地域還元」を実現していただいたわけです。

私としては、そこで明らかになったことを、私の心身共に健全なうちに何とかまとめて、それを町に報告するとともに、その原資料はすべて、建物と同時に町の郷土資料館に寄贈し、町民の皆さんの共有財産にして、長く「故きを温ねて新しきを知る」、そういう運動に役立てていきたいという気持ちでおります。

そのような意味で、ご調査いただいた方への感謝の気持ちをここで表明するとともに、「宮城方式」というものがいかに有効な方法であるかを、ここでご紹介いたしました。以上です。(会場拍手)

奥村 それでは最後に、コメンテーターの方から、報告の順番とは逆に、最後に平川さんのコメントで終わりたいと思います。時間がないので、一言ずつでお願いします。

久留島 私は今回このシンポジウムに参加させていただいて、歴史資料を地域に残すことの意味をあらためて考える機会を与えられました。私も歴史研究者としてそれなりに倫理を持っているので、どうやって歴史資料を「つなげて」いくか、それを残す意味をどう考えるかということを痛切に考えました。

そのような意味で、私は平川さんがおっしゃったように、色々なことを考えだすとなかなか難しいのですが、拠点となる場や人を地域の中でどうやってつくっていくかということが本当に大事であり、「今」を逃してしまうと20年後はないのではないかという危機感を持っています。

いまだったら、まだ何とかなる。今日もこれだけの方が参加しているのは、所蔵者だけではなくて、地域の人たちが自分たちの歴史をつないでいくという意欲を持っているからだと思います。そのことを大事にすることが必要だと、あらためて思います。

菅野 今日のお話を聴いて一番感じたのは、やはり継続性という問題が、これからの活動では一番大事だということです。

先ほど、倫理の問題でご質問がありました。大きな問題は、ある先生が学校を退任されてしまうと、そこで調査の継続性がなくなる。そこが今回の未返却資料という問題で大きな問題になったと思います。これは我々行政の史料保存機関においても、古い学芸員から新しい学芸員へ、ベテラン職員から新人へと



いう人材の養成をきちんと行うべきです。要するに、ハードだけではなくてソフトの問題を重視すべきだということです。

そのことはNPO法人もまったく同じであり、10年後、20年度には制度がどうなっているかわかりません。ただ、いま本当に精力的に動いている人が、「万が一」という発言が先ほどありましたが、そのようなことがなくても、人は自然に年をとっていくし、社会も変化していく。その中でもきちんと組織として、あるいは「仕組み」とまではいかなくても、我々歴史に携わる者として活動を継続できるような何らかの仕組みというものを、すでにネットワークが立ち上がった地域では、次の段階としては、考えていく必要があると思います。

あとは、歴史資料保存のネットワークが立ち上がっていない場所をどのようにしていくのか。仙台の場合は大学がたくさんあるなど非常に幸運な面もあると思います。そのような条件がない地域をどのようにしていくのか、まだまだ課題は大きいと思います。

西村 先ほどの研究者倫理の話は、まさにいま菅野さんがおっしゃっていることと同じであり、例えば僕がやっているNPOにしろ、今行っている業務にしても、僕が死んでもきちんと継続して続くような活動ができればいいと思います。

ただ、先ほど斎藤さんからご質問があったNPOの「功罪」に関して、平川さんは「思考停止」と言ったが、僕は若干違って、僕がいま携わっているある自治体の教育委員会からは、僕らの活動はかなり批判的に見られています。というのも、NPOに史料保存をしてもらうと文化財課の予算が削られる、だからNPOだけで活動すればいいだろうと言われるので、できる限りコミットしないほうがいいと教育委員会の方からも言われる。行政との関係はなかなか難しいと常々思っていて、それが先ほど言った「新自由主義」という話ともリンクするわけです。

そういう問題はありますが、おそらく平川さんに全体をまとめていただくと思うのですが、日々やらなければいけないことがある、ということは絶対にいえます。いろいろなことにめげずに頑張っていきたいと、所信表明したいと思います。

新 今日私どもの新しいネットワーク立ち上げに関して、ここで皆さんといろいろ勉強させていただき、本当に有意義な一日を過ごせたと思います。

私が文化財課に所属していたときにも、文化財の「保護」を考えていく、ということを常に言われていました。「保存」ではなく「保護」と言ったのは、いわゆる保存と活用を含めたものが文化財の「保護」なのだととらえていたからです。

われわれ博物館の使命は、モノが収蔵庫に入っていれば、その時点では資料を活用する学芸員がいなかったり、市民や子どもたちが活用する機会がなくても、10年後、20年後、100年後に、モノさえ残っていれば、活用することは可能だと考えています。

博物館のミッションというのは、そこにあると考える。

蝦名 先ほど、最後に大沼さんから過分なお言葉をいただき、自分が述べようと思っていたコメントが飛んでしまいました。

自分自身、振り返ってみると、自分の研究に関わるような史料しか見たがらなかった傾向はありました。ただ、いま大沼さんの話にもあった地域での調査であるとか、くりはら田園鉄道の調査に関わってみて、このような資料整理作業・保全をやった先に何かが見えてくる。実際に活動するまでは、この作業にはどういう必要性があるのだろうと悩むのですが、やり遂げたところに新しい可能性が見えてくる。

そのようなことを考えながら、これからも資料保全を続けていきたいと思います。

佐藤 私の報告に関してご質問があったので簡単にお答えすると、報告でも述べましたような歴史研究者による調査がどのように行われてきたかということ、もう一度検証しないといけない。「終戦直後の古文書資料レスキュー」が、報告で述べたような結果になってしまった以上、今後の保全活動においても「いつか来た道」を繰り返さないようにすることが必要であり、そのための方法を考えなくてはなりません。

倫理の問題は、最後にまとめていただけたと思いますので置いておきます。それから、先ほど蝦名さんからもお話がありましたが、大沼さんには本当に過分なお言葉をいただきました。今日のシンポジウムには大沼さんを含め、各地の調査でお世話になった方々もたくさん来ていただいています。

「継続性」という問題を議論すると、私自身も今後活動にどのような立場で関わっていけるのか、歴史資料保全を継続的に進めているような「新しい時代」

がやってくるまでには、理念と実際のギャップを抱えてしまうような「犠牲」も必要で、私自身がその「犠牲者」となることも仕方がないとも思っていました。しかし、今日これだけの皆さんにお越しいただいたので、もしかしたら頑張れば何とかなるのではないか、という勇気をいただいたという感じがします。

平川 いろいろと示唆に富むご指摘をたくさんいただきました。「議論はするな、考えるな」ということはもちろん冗談で、本当に考えるなと言っているわけではありません。

ただし、解決の方法というのはなかなかありません。これは考え方の問題です。すなわち、人によって解釈や論理付け、正当化の仕方は変わります。つまり自分が納得する論理を考えればいいのであって、どれが「正しい」論理であるということではありません。議論を行うとしても生産的な議論をしようというのが、私が今まで申し上げてきたことの主旨です。

ですから、西村さんが提起されたような問題は、西村さんがご自身の活動をどうやって正当化されようとしているか、という問題意識だと私は受け止めているわけです。

報告の最初のところで、私は史料保全については、災害に対する対抗カルチャーだということを申し上げました。文化運動であると考えています。一方で、史料保全には研究の視点が必要だという指摘もいただきました。もちろん、われわれは単に社会運動をやっているということだけではなくて、この史料保全自体が研究であると考えています。

それは保全された古文書を「分析」し「解釈」することが研究という意味ではありません。もちろんそのことも「研究」ですが、これが実は従来の歴史学における「研究」の在り方でした。ですから、「史料を残す」ということは「研究」ではなかったということです。あくまで研究の素材を確保するため、ということですが、私は史料を保全すること自体を研究の対象、さらには研究そのものにしたい。

このことは報告の中で少し申し上げたわけですが、これは新しい学問をつくっていくことです。保全のノウハウをどうやって作り出していくかということ自体が、試行錯誤の中で新しい学問分野を切り開いているのだという気持ちを持って、この保全活動を行っているわけです。

ですから、これは「研究」であり「運動」であると、私の中では位置付けができています。私はこのようにして自分の行っていることを正当化しようとし

ています。

それから、これまで四百十数軒の旧家の方々と接触してきて、本当に痛切に思ったのは、所蔵者の方々とお会いしていろいろな情報をおうかがいし、ヒアリングノートに残していくわけですが、古文書だけでは得られない情報、先ほど会場から家の系図の話とか、語り部の話というご指摘がありましたが、保全活動自体が、まさに古文書では得られない情報を、実際にそのお宅の方から得る非常に大きな契機になっているのです。

ですから、我々は地域に遺された古文書や古美術品を保全しに行くだけ、写真を撮りに行くだけではなくて、地域の口頭伝承の記録も採録しているのです。それらは報告書などの形で記録に残っています。

それから、地域に入って本当にありがたいと思うのは、文化財保護委員の先生方や郷土史サークルの方々との存在です。地元で活動するときには、これらの方々、さらには行政区長さんや地元の色々な方々のご案内をいただくのですが、そこでの交流を通じて、実は戦後歴史学は、郷土史をあまり大事にしてこなかったということを痛感しています。

先ほど菅野さんでしたか、郷土史と歴史研究者との溝が深まっているのではないかというお話がありました。私もこの7年間の活動の中で、本当にそのことを痛感いたしました。それは、自分自身が「郷土史」という問題をほとんど考えていなかったということでもあります。自分自身は「地域論」や「地域研究」はするが、「郷土史研究」という形では考えていなかったということです。

ところが実際には、古文書以外の情報として得られる地域の歴史は、もちろん先ほどの旧家の伝承ということもありますが、地元の郷土史の方々が無尽蔵に情報を持っている。すなわち、地域での保全活動は、我々がそのような情報を地元の方々から与えられる場にもなっているということです。

もう一つ、私がこの数年間思っているのは、歴史研究者は、もちろんそれぞれが研究フィールドを持っているわけですが、「郷土史家」にならなければいけないのではないかと思います。「地域史研究者」ではなくて「郷土史研究家」になる、それが地域に対する愛着を生む。

「地域史研究者」は「地域」に対する愛着を持っているのでしょうか。「分析の対象」ということだけではないかと私は思います。いま日本史研究で行われている「地域論」は、あくまで論理的分析の対象でしかないし、その結論でしかない。しかし「郷土史」となると、地域に対する愛着がないと、「郷土史研究家」とは名乗れない。

ですから、むしろ多くの「地域史研究者」が、自ら「私は郷土史研究家です」と言えるようになることで、今後研究者と地域の人々との連携を深めていけるのではないかと思います。

戦後歴史学が切り落としてきたものを、私はこの運動と研究の中で再発見していきたい。そして、もう一度そのつながりを復活させる中で、地域の人々からの信頼を取り戻していくような動きにしていくことができればと考えています。

継続性の問題が出ました。私はあと数年で定年を迎えますが、たぶん後に続く方がきちんと続けていっていただけるのではないかと考えています。

奥村 司会からひと言だけ。歴史資料を保全することは歴史研究者の職業的倫理だという問題は、大学、特に国立大学の研究者にはその責務があると思います。各地域にある大学が、どのようなかたちで地域に向かい合うかということそのものと関係しているように感じます。

歴史研究者も含め、地域の内部にいる大学の教員は、必ずそのような地域に対する意識があるのかとおもうのですが、歴史研究者の中でもご指摘のあったような職業的倫理が存在しない、ということに関しては、これから私たちが考えていかなければならない問題だと思います。今日はそのことを学ぶことができて大変よかったと思います。

実は、「地域資料学」をどうするかということは、先ほどの平川さんの話に関しても、戦後歴史学の中でどのように考えられてきたか、もっと議論しなければならない問題がたくさん含み込まれているように思います。私たちは今後、文部科学省科学研究費〔基盤研究（S）「大規模自然災害時の史料保全論を基礎とした地域歴史資料学の構築」研究代表者奥村弘〕を基盤にした全国的な研究グループの中で考えようとしています。

ただ、ここでの議論は「開かれた」研究でないと意味がありません。さまざまなかたちで議論の場を設け、研究者の方々に加え、博物館や市民の方々に、いろいろな意見をもらって進めようと考えています。ぜひご支援をいただければと思います。

それから、今回ご報告のありました、仙台で進めている地域での活動に対して、引き続きご支援のほどよろしく申し上げます。（会場拍手）